

Title	ジルベール・シモンドンにおけるinformation の概念について：ベルクソン受容という背景から照らした考察を中心に
Author(s)	橘, 真一
Citation	年報人間科学. 2012, 33, p. 99-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4385
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究ノート〉

ジルベール・シモンドンにおける information の概念について —ベルクソン受容という背景から照らした考察を中心に⁽¹⁾

橘 真一

要旨

本稿は、フランスの哲学者ジルベール・シモンドン (Gilbert Simondon, 1924-1989) において、独自の用いられ方をしている information という語を、彼が第一に参照していると思われるアンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の思想を手掛かりに読み解いて行く。information という語が現代的な意味をもっていなかったベルクソンの時代においては動詞形の informer で、「形相を付与する」という質料形相論の意味で主として用いられている。たしかに、シモンドンは質料形相論を批判するのだが、ベルクソンが informer を使用する文脈は、むしろ質料形相論を越え出ており、シモンドンの姿勢はそれに同調しているように映る。information の有する作動のなかで、シモンドンが取り出すのは、齟齬が生みだす意味作用であった。この点が通常の使用と大きく異なるのだが、この定義はシモンドンの思想全体にまで及ぶように思われる。そのことをベルクソンと引き合わせながら検討していくのだが、そうすることによって次第に明らかになっていくのは、ベルクソンとシモンドンの思想の相互補完的な関係である。各々単独では難がある点も、両者の共闘で乗り越えられているところがあるのではなからうか。information 概念の定位を始まりにおいては目的にしていた本稿は、終わりには、いわば二つの思想の一心同体の可能性を説くことになるだろう。それもまた information なのだろう。

キーワード

ジルベール・シモンドン、アンリ・ベルクソン、information、齟齬、意味作用

はじめに

フランスの哲学者ジルベール・シモンドン (Gilbert Simondon, 1924-1989) において、information という語が独自の用いられ方をしていることはよく知られている⁽²⁾。それは通常「情報」と訳して済まされるような、通りのよい概念ではない。伝達される信号としての意味もあれば、遺伝情報の意味も含まれている。シモンドンのそれは、広義かつ一般的語用例を外れるような意味をも含有する概念である。河野哲也氏はそうしたシモンドンの information 概念に、以下のような問い掛けを発している。

情報 [information] とは、生物のポテンシャルを変えることができる刺激パターンのことをいうのだろうか。すると、何が情報であるかは事後的にしか分からないことになる。情報が発明されるものではなく、発見されるものであるならば、むしろ生物の反応に先だって、情報が存在していなければならないのではないだろうか。情報は根源から生物を変える可能性をもつはずだ⁽³⁾。

この引用で言われている通り、information は「刺激パターン」でもある。また、ここで問われていることの答えを先取りしておけば、information は生物の反応や発見に先行する。ただし、事後的にしか分からないものだけを information というのではない。これらのことは、追ってシモンドンの哲学的立場と照らし合わせながら再び論じられる。

これから、われわれが検討して行くのは、まさに information の可能性である。とりわけ、この引用の「根源」という言葉にどれだけの射程をもたせることができるかがひとつの賭金になることだろう。

議論は以下のように進む。まずフランス語の information の語感について前置きしたあと、哲学的背景としてベルクソンにおける informer の使用文脈をみることによって、informer が引き寄せる問題を確認する。そこから次に、とりわけシモンドンが質料形相批判に躍起になる動機を探って行く。さらに、いよいよ information とは何かに迫る段階では、そこにベルクソンの影をみてとりながら、核となる定義を取り出す。その定義がシモンドンの哲学全体に行き渡ることを示唆してのち、なおベルクソンとのつながりの根強さをみる。そうして本稿から明らかになるのは、information の中心的定義と、シモンドンがまごうことなきベルクソンの継承者の一人であり、その哲学が、ベルクソンに分け入る姿である。以下本論に入る。

information の来歴

そもそも、information という語はどのようないわれを有するのか。シモンドンがこの語を独自の意味で用いているとするなら、語源的な一抔のおさらいをしておくことは議論に与するはずである。

まず、英語の information は「情報」と訳されるのが常であるが、フランス語の「情報」は普通 *renseignement* だったのであり、現在、英語とほぼ同様の意味で用いられているのは、英語から流入した用例が主であることをおさえておかななくてはならないだろう。フランス語の information は「収集」といった意味合いが強い。情報に関わりはするが、むしろその調達の方を指していたような言葉なのであったろう。したがって、シモンドンが 1958 年の博士論文提出の時点で既に、information という語を英語的な意味で用いていたのには、慣例とは別の淵源を見てとらなくてはならない。それはおそらく、ウィーナーのサイバネティクス由来であると推察される。比較的早い時期からサイバネティクスに関心を示し、アメリカにも赴いて議論したほどの、シモンドンの講義録には実際、『サイバネティクス』が文献表にあがってもある⁽⁴⁾。そこで提示されている 1951 年のド・ブロイの編纂による仏語論集タイトルにも、information の語が使われている⁽⁵⁾。

もちろん、以上は形式上でのことであり、シモンドンが用いる概念内容に盛り込まれている含意は、通信の事例が主であるサイバネティクスのみでは酌み尽くせない。したがって、系譜的に哲学史も押さえておかななくてはならない。シモンドンにとって第一に重要な思想の源泉は、端的にベルクソンである。実際、ベルクソンはバシュラールやメルロ＝ポンティとともに、シモンドンが活動していた当時の「三大思想」の一つにも数えられている⁽⁶⁾。また、シモンドンの著述は、さしたる定義や説明もなしにさまざまな術語を頻繁に使用するというスタイルを有する⁽⁷⁾。そのため、シモンドンの哲学を研究するにあたっては適宜、哲学的文脈が補われるべきであるという方法論上の要請があるだろう。

ベルクソンにおける informer 使用の文脈

ところで、シャノンの情報理論やサイバネティクス登場以前を生きたベルクソンは、information という語を現代的な意味では用いていないだろう⁽⁸⁾。そこで、シモンドンの information についてみる前に、まず、語源である動詞形の informer のベルクソンにおける使用を議論の導入としよう。動詞形は原則的に、スコラ哲学の「形相を与える」という古来からの意味でベルクソンも用いている。『創造的進化』においてこの語を用いている箇所を引用しよう。

われわれは、知性は質料を用いて成型され、まず何よりも製作 (fabrication) を目指すと述べた。しかし、知性は製作するために製作するのだろうか？あるいは知性は無意志的かつ無意識的でさえありながら、〔人工物とは〕ちがうあらゆる事物を追いかけたりはしないのだろうか？製作することは質料に形相を与える (informer) ことであり、質料を柔軟にし、従わせることであり、質料を我が物とするために質料を道具に変えることである⁽⁹⁾。

ここから、まずはベルクソンにおいて informer が製作という主題と結びつけられていることを確認しておかなければならない。そして、製作こそはベルクソンが、人間の、あるいは知性の揺るぎない特徴として挙げるものである。それゆえ、ベルクソンは、人間はホモ・サピエンスであるよりホモ・ファベル〔工人⁽¹⁰⁾〕であるだろうと述べていることはよく知られている通りである。ベルクソンによる製作の定義を引こう。

要するに、本来の歩みとしてそこに現れているだろうと想定される知性は、とりわけ道具をつくる道具のような人工物を製作する能力であり、それによって製作を無際限に変化させる能力である⁽¹¹⁾。

この記述は極めて重要である。ベルクソンにとっての知性とはこのように製作と切り離せないものであり、製作は人工物をつくることなのである。言うまでもなくその最たるものは機械である。こうした人工物は、ついには製作それ自体を変化させるが、それを可能にしているのが知性なのである。知性は製作をめざす。しかし、製作の過程に informer が含まれているというのはどういう事態であるのか。再びベルクソンが informer を用いている箇所を確認しよう。

製作はもっぱら生みの質料に作用する。それは以下の意味においてである。すなわち、たとえ製作が組織化された素材を用いているとしても、それらに形相を与えた生命 (la vie qui les a informés) を念頭に置くことなく、製作はそれらを不活性物質扱ひする⁽¹²⁾。

製作は知性の行為であり、それが優れて人間的な特徴なのであるが、人工物をつくる時人間は、生みの質料に形相を与えた生命の存在を忘れがちである。製作段階で素材は所与だが、その素材自体は生命の

介在を経て構成された物質なのである。

このように、ベルクソンにおいて *informer* とは、やはり「形相を与える」という意味で用いられている言葉であるが、形相を与えるのが生命であると言われている点には注意を要する。この点がやはり、ベルクソンが『創造的進化』の注で触れているプロティノスとは毛色が異なる。ここでは「この哲学者〔プロティノス〕のロゴス (λόγος) は発生させ、形相を与える力能 (*une puissance génératrice et informatrice*) である⁽¹³⁾」と言われている。プロティノスのロゴスは端的には自然 (ピュシス) であり、生命に魂を吹き込むものである⁽¹⁴⁾。

ここで『プロティノス講義』を持ち出すことが許されるなら、議論はなお展開をみる。『プロティノス講義』では、*information* が使われており、そこでの意味もやはり「形相付与」である。いわば時空間の外にあるアイデアに対し、産出的ロゴスはアイデアから下降して時空間のなかで働く。ロゴスは力と化したアイデアである。そして「質料はロゴスによる形相付与 (*information*) と敵対する」のであり、たとえば形成途上の存在を質料に逆戻りさせてしまうこともある⁽¹⁵⁾。

このように、ベルクソンにおける *informer* の意味は「形相を付与する」にほかならないが、使用されている文脈は質料形相論の枠組みに収まるようなものではない。むしろ質料形相論を越えて行く方向性をもつことにおいて、シモンドンも志を同じくするように思われる。

シモンドンにおける質料形相論批判の射程

シモンドンの主要敵が質料形相論であることはよく知られている。が、先程までの確認に対応させるなら、シモンドンの質料形相論批判はこう言い換えることができる。すなわち、質料形相論は狭義の *informer* の領域に留まっており、その意味で個体化論として不充分極まりないのだと。下記の引用をみてみよう。その際、「関係」という言葉に注目していただきたい。「関係」は、シモンドンの個体化論にとって鍵概念である。

しかしながら、質料形相論図式の使用には重大な困難が生じる。質料形相論図式は生けるものの個体化原理たるものは示せないのだ。まさしく質料形相論図式は質料と形相を結合する関係に先行するひとつの存在として、その二項を割りあててしまうからである。もしくは、少なくとも質料形相論図式はその関係を明瞭に考えることができないからである。質料形相論図式は混淆や部分部分の再結合しか表せない。質料に形相を与える質料のことは質料形相論図式では十分に明確にならない。質料形相論図式を用いることは個体化原理が形相や質料にあると仮定することであり、その質料と形相の関係のうちにあるとは仮定しないことである⁽¹⁶⁾。

米虫正巳氏によって指摘されているように、シモンドンの言う関係は、既にして存在している二項間の関係を想定しただけでは足りない⁽¹⁷⁾。この関係は、一先ずは個体＝存在発生の方向で理解される。個体は生成や変化の時系列を有する。質料形相論図式はそうしたことも説明できない。要するに、少なくとも

も質料形相論図式には質料に形相が付与されるそのプロセスの記述が決定的に欠けているのである。ところで、アリストテレスからしてすでに、質料形相論の具体例にはたとえば寝台という技術製品が挙げられていたように、技術的対象と質料形相論には密接な関わりがある。ゆえにシモンドンにも、製作という主題、それと関係を絡めて述べている箇所がある。これについては技術論から引用する。

技術的対象の製作はもはや形相と質料の間のあいまいなゾーンを含んでいない。前 - 技術的知は前 - 論理的でもあるが、それは前 - 技術的知が——質料形相論図式のように——関係の内部を発見することなしに諸項の対を構成している意味においてである。反対に、技術的知は論理的であり、それは技術的知が関係の内部を探求するという意味においてである⁽¹⁸⁾。

質料形相論の欠陥に対して、技術的知は諸項の関係の内部に分け入っていく。有名な煉瓦製作の例では、型から煉瓦が取り出される一瞬間に煉瓦がつくられるのではなく、職人が粘土を捏ねているときや、型に粘土をこめているときの、どこからどこまでが煉瓦の生成といえるのかとまくしたてる。とりわけ、エネルギーの観点を導入したとき、「圧力によって粘土の内部で現出するポテンシャル・エネルギーは〔型への〕詰め込みのあいだに現実化する⁽¹⁹⁾」のである。

質料と形相は、エネルギー系の生成単位が、質料と形相のあいだの力のまとまりにおいてこうした関係を構成する時に、形を成すあいだに把握されなければならない。本質的で核心的なのは、エネルギー的潜在力と現実化の境界を仮定するエネルギー的操作である⁽²⁰⁾。

とりもなおさず、シモンドンにとって、「一つの技術的対象は生成単位である⁽²¹⁾」。とらえどころのないはずの生成は、技術的対象という単位を得る。次の引用はそうした技術的対象が、システムへと合流していく様を描いたものである。

技術的対象はしたがって、収束する系列 (série) の終局によって得られた特殊類型として実在する。そうした系列は抽象様態から具体様態へと進行する。その系列は技術的存在をそれ自体と完全に融合し、統合されたシステムにする状態へ近付いて行くのである⁽²²⁾。

収束とは具体様態への移行を意味する。つまり文字通り、技術的個体化とは具体＝凝集化である。「質料 - 形相 - エネルギーの三幅対⁽²³⁾」を内蔵した具体物こそが生成を可能にする。

ベルクソンという基盤からみたシモンドンの information

前節では、ベルクソンの informer の文脈とシモンドンの姿勢の同調をみようとしたわけであるが、シモンドンの information はどうなっているのだろうか。実際、シモンドンの博士主論文の題名は *L'individuation*

à la lumière des notions de forme et d'information であり、information は間違いなく彼の中心概念である。その序論において彼の試みを述べた箇所と、両目の網膜が像を結ぶ例における記述を立て続けに引用しよう。

形相の概念は information の概念に替えられなければならない。information は個体化される準安定的平衡システムの実在を仮定する。形相と違って、information は決して唯一の項ではない。それは齟齬 (disparation) から生じる意味作用である⁽²⁴⁾。

個体の発生は、基盤の齟齬の対に本質的に属する両立不可能性を解決する、継起的な「パターン」の発見である。すなわち、齟齬の対のなかには含まれていないながら、その対のおかげで系になるところの次元である、解の次元、あるいはまた意味作用の次元の発見。このように、各々の網膜は二次元のイメージに覆われていて、左右のイメージは齟齬をきたしている⁽²⁵⁾。

このように、シモンドンの information はまず第一に、齟齬から生じる意味作用である⁽²⁶⁾。伝達されるメッセージのような通常の意味と大きく異なっているのはこの点である。forme の概念が、ただ一項に執着しがちなのに対し、information は常に二項を意味作用の元にもっている。さらに重要な点は、網膜の例では、両立不可能だったはずの左と右の像が、結ばれたあとでは、一つの像としての意味を産出することである。その際、左と右の像は何ら失われることなく、二つで一つになるのである。こうした事態を耳にしてわれわれが真っ先に思い出すベルクソンのテキストは以下のものではないだろうか。

しかし、はじめは一つの網膜があるのではなく、二つあるのだ。したがって、どのように別々のものと仮定された二つの感覚が、空間の一点と呼ばれるものに対応した唯一の知覚に融合するのかを説明しなければならないだろう⁽²⁷⁾。

『物質と記憶』の序盤でイメージのひろがり (extension⁽²⁸⁾) を語る重要な一節に差し挟まれるこの網膜の例は、そのままにシモンドンによって継承されている。ベルクソンはこの引用の直後で、ひろがりをもたないものである諸感覚がどのようにしてひろがりを与えるのかと、問うている。そこに何か新しいものが導入されるが、その選出プロセスに説明はなされないままであるともいう。シモンドンはそこに如何ほどか説明を付与しようと試みるだろう。つまり、融合はそもそも齟齬から生じているのである。

実のところ、こうした information の定義は、シモンドンの個体化論の行き着く先である集団的個体をまで貫いている。

超個体的なもの (le transindividuel) は諸個体を局限せず、同時に生じさせ、意味作用によって諸個体を伝導させる。第一義的なのは information の関係であり、連帯や機能的分化の関係ではない⁽²⁹⁾。

超個体的なものはほとんど集団的個体と同格である。すなわち、集団的個体はそのほかの個体とともに、超個体的なもの基礎の一つである。単独では存在できず、必ず諸個体という基礎を有する⁽³⁰⁾ところの超個体的なものはしかし、意味作用をもつのであり、そこには information の関係すらみてとれる。端的には社会である集団的個体は、労働などの機能的分化や連帯によって説明されがちだが、シモンドンによれば社会は重なり (recouvrement) によって成り立っている。「この重なりはひとつの個体化であり、闘争の解であり、闘争的緊張から有機的かつ構造的で機能的な安定性の受入れ (assomption) である⁽³¹⁾」。

このように、齟齬から生じる意味作用としての information はシモンドンの個体化論を貫く軸になっているし、その思想の淵源としてベルクソンを読むことができるだろう。そうした観点からみたとき、ベルクソンの以下の文章は以前とは異なった色彩を帯びるのではないだろうか。

われわれは一度の分離で単一の傾向にさまざまな面をともなった、はじめはなかった諸傾向の実現を引き起こすように見える法則を二分法の法則と呼ぶ。そしてそのとき、一度の分離によって実現した各々二つの諸傾向に内在する要請を二重狂乱の法則と呼ぶことを提案しよう。この要請は——あたかも終末とかいうものがあるかのように！——終末まで付随する⁽³²⁾。

『二源泉』における二分法と二重狂乱の法則は、二項の齟齬が生みだす意味作用ではないのか。おそらく、シモンドンの個体化の体制区分でいえば、二分法の方は物理・生物的個体化、二重狂乱の方は心的・集団的個体化の体制に入るだろう。前者を第一の個体化と呼び、第二の個体化である後者は厳密に言えば個性化 (individualisation) である⁽³³⁾というシモンドンの図式は、こと自然のなかでの統一 (unification) に至っても、やはりかなり重なってくるだろう。「それは自然の操作である⁽³⁴⁾」というベルクソンの言葉は、もはやどちらが言っているのかわからなくなる。

操作としての information と個体

個体化の体制のもとでの個体＝存在発生 (ontogénèse) を探求するシモンドンにとって、先に確認したように、生成の単位である技術的対象は第一義的であるし、操作についても、技術的な操作についての以下の記述に、操作と information の関係の一端を垣間見ることができる。

最も完全な技術的操作——それは最も安定した個体を生産するのだが——は形を成すなかで information として特異性を利用する操作である。木目で割れた材木のように。それはあれこれの特異性の、ほとんどマイクロ物理学的な水準にとどまる技術的動作を強いたりはしない。というのも、information として利用された特異性は、技術的操作によってもたらされたエネルギーを変調することによって、より大きな階梯に作用を及ぼすことができるからである⁽³⁵⁾。

まことに、「information は形相からでるのではなく、諸形相の集合でもない。それは諸形相の変異度で

あり、形相に対する変異の供給 (apport) である⁽³⁶⁾。」information は変異をもたらす。

information が変異をもたらす意味作用であるということはわかったが、それでも、メッセージという通常の意味の information との距離をどうとればよいのか。

information であるか否かは、単にある構造内部の特徴によるのではない。information は物ではなく、あるシステムに起こり、そこで変化 (transformation) を引き起こす、物の操作である。information は変化をもたらす偶発行為や、受容の操作の外では定義されえない⁽³⁷⁾。

このように徹底して information は操作であるというシモンドンの information が、通常の意味の information でも使われているように思えるのは、混乱のもとになってきた。前節で確認した「パターン」もそうである。事実、シモンドンも information を通常の意味のように使うことがあるのだが、それはとりわけ、個体と関連して information が語られるときである。

個体はある形成 (formation) の結果であって、網羅的に総括され、大規模な集合を再びもたらさう。個体の実在とは、増幅する転送のこの操作である。そうした理由で、個体は常に、個体に先行するものとそれから生じるものとの、あいまいで二重の関係をもっている。増大は、個性性を確立する転送のこの操作の、最も単純で最も基礎的なものである。個体は information を圧縮し、転送し、それから、新たな環境を変調するのである⁽³⁸⁾。

このことを確認しておけば、ある程度混乱は避けられるだろう。傾向を束ねる個体との関連のなかで、いわば形相を付与された information をながめると、通常の意味にもなるというだけのことで、本義は確認した通りである。

ベルクソンとシモンドン

ここまで、シモンドンの information の概念の独自性を、いわばその基盤としてのベルクソンという背景を補いながらみてきたわけだが、ここで今一度、ベルクソンとシモンドンの哲学の関係を推察しておこう。というのも、ベルクソンの「熱心な読者⁽³⁹⁾」でさえあったシモンドンが行っているのは、徹底したベルクソン哲学の補完であるという見方もできると思われる節があるからである。もしそのように言うことが許されるならば、すなわち、もしベルクソンの哲学に何らかの欠如があると言うことが許されるならば、ベルクソンとシモンドンは一心同体の思想を以て、まずはひとつの「自然哲学」を構築しているといえないか。このことを、シモンドンの技術論について論じた廣瀬浩司氏の次の文章から考えてみよう。

二極管から三極管、さらには四極管という真空管の進化の歴史をたどってみるならば、それはたしかに複雑化と分化 (différenciation) の歴史である。しかし陽極と陰極の間にグリッドや静電格子が挟

まれ、さらにこれらが分化していく過程は、たんなる複雑化ではなく、それぞれの要素が多機能化し、より凝集化した構造を形作ることによって、それまで障害になっていた二次的な効果が消滅していく過程なのである。言い換えるならば、技術的な進歩は、収斂と分化という一見矛盾した二つの運動を関数に規定されるようなものである⁽⁴⁰⁾。

先に確認したように、シモンドンにとって技術的对象は生成の単位となるものである。それは収束によって具体＝凝集化 (concrétisation) するのであり、そのことによって自然とも常に融合している。シモンドンの技術的個体化論とでもいうべきものはそのように、収束による統合を強調する傾向がある。それに対して、ベルクソンの個体化論のなかでも、とりわけ『創造的進化』における生命的個体化論においては、分化という傾向が全面に押し出されてくるだろう。しかし、ベルクソン自身が、そしてそれを継ぐようにシモンドンも言っているように、分化と統合は同時進行の営為であるはずである。ともあれ、意図してか意図せずか、シモンドンは結果的にベルクソンの哲学体系において不足しがちな記述を補っているとはいえよう。たしかに、『個体化論』のなかでも『技術論』のなかでも、シモンドンは何かにつけてベルクソンの名を出して、批判する。ところが、理論や立場でもなく、援用でもなく、名指しで、しかも頻繁に批判される哲学者は、シモンドンにおいてはベルクソンだけであるだろう。その意味でベルクソンは特別視されていると言ってよい。たとえば以下の引用をみてみよう。

社会的なものは、内 - 集団を介した、個体的な存在と外 - 集団との媒介によってつくられる。ベルクソンのように開かれた集団と閉じた集団を対立させて処理しても無駄である。社会的なものは、短い距離では開かれており、長い距離では閉じているのである。社会的操作は、個体と集団の境界にというよりむしろ、内 - 集団と外 - 集団の境界に位置づけられる⁽⁴¹⁾。

シモンドンにとって、社会とは端的に内と外との重なり (recouvrement⁽⁴²⁾) が規定するものであり、その点で社会を実体化するような質を付与しても「無駄」なのである。シモンドンはときにこのように痛烈にベルクソンを批判する。本稿に関連して、もう一箇所挙げておこう。

ベルクソンは技術的活動をホモ・ファベルに結びつけ、知性との関係を示した。しかし、技術性の基礎としての諸固体 (des solides) の工作という考えにおいては、真の技術性 (technicité) を発見することを妨げる前提がある⁽⁴³⁾。

ここでは、知性と製作の主題を結びつけたことを評価している。が、こと技術性に至ると、途端に難点を持ち出してくる。シモンドンにとっては諸固体なるものは所与ではない。硫黄結晶の例の通り、化学的な物理的個体も発生するものである。個体＝存在発生 (ontogénèse) は、その終着点と位置づけられる超個体的なものに至っても、「個体とともに」あったのだった。個体化の体制は階層構造を有しているし、

個体＝存在発生は下方とされる物理的水準から上方とされる集団的水準へと方向をもつ。例えば、物理的個体は物理的個体化の体制のもとにのみあると言ってよいだろうが、生物的個体は必ず下方の物理的個体が要素になっている。ゆえに、おそらくシモンドンに言わせればこうなる。ベルクソンは製作を知性と連結することで技術的個体を個体＝存在発生に組み入れることに成功したが、その代わり物理的個体を取りこぼしてしまっただけである。真の技術性とは、十全な発生の相のなかにこそ発明されるのである。その発明には技術的構想力 (imagination technique) という極めて重大な概念が関与している。

われわれは技術的構想力を諸要素の技術性への (à la technicité) 特有の感度 (sensibilité) によって定義されるものとみなすことができる。ありうる寄せ集め (assemblage) の発見を可能にするのは、技術性へのこの感度である。発明者は、形相を付与する仕方に基づいて無から (ex nihilo) 生じるのではなく、諸要素を組み入れる個体的存在を発見する、既にして技術的な諸要素に基づいて生じるのである⁽⁴⁴⁾。

シモンドンの技術的構想力とは何かというのは非常に大きな問題で、本稿では扱いきれないため、何れの機会に譲る⁽⁴⁵⁾。しかし、この技術的構想力がこそが発明を可能にする。シモンドンにおける発明 (invention) は、またしても独自の意味である。しかし、原理的には変わらない。発明者が無から創造するのではなく、個体発生のなかの収束が可能にするのが発明である。さらには、技術性という言葉も独特なのであった。技術性とは当面、「対象の具体＝凝集化の程度⁽⁴⁶⁾」と解されうる。ところで、技術性に関して、以下のようにならされていることには注意が要される。

技術性は、技術的個体における連合環境 (milieu associé) によって及ぼされた自己制御同様の、要素のポジティブな特徴とみなされうる。要素の水準にある技術性とは具体＝凝集化である⁽⁴⁷⁾。

連合環境とは、端的に言ってしまうえばカップリングである。それはついに機械 - 人間 - 自然にまでいたる。注意を要するのは、技術性が要素のポジティブな特徴と言われている点である。この特徴は、トランスダクションというシモンドンの概念の骨子に相似的である。トランスダクションとは、原義的には、無際限に増大する能力ということになる⁽⁴⁸⁾。それは物質に顕著なポジティブな能力である。このように、シモンドンはどこまでも物質を個体＝存在発生から孤立させようとはしない。

ところで、ここで技術性への感度といわれているその感度とは何であろうか。これについてわれわれは再度ベルクソンにヒントを求めることができる。『物質と記憶』のなかの、先に引用した網膜の例に続く文章を、ここでみてみよう。

〔なぜ二つの像が一つの知覚になるのかという〕この問題が解決されたと仮定しよう。いわゆる感覚 (sensation) はひろがりをもたない。どのようにして感覚はひろがりを与えるのか？延長のなかでまっ

たく諸感覚を受け容れ可能な枠を見るにせよ、一緒くたに混合することのない意識のなかで共存する諸感覚の、たんなる同時性の結果を見るにせよ、いずれにせよ、延長とともに何かわからない新しいものが導入されるだろう。感覚が延長と結びつくプロセスと、空間の規定された一点の各々の要素的感覚による選択は説明されないままだろう⁽⁴⁹⁾。

ここで感覚はひろがりをもたないと言われている。もちろんイマージュが延長と感覚を結びつけるのであるが、それにしても、程度の差こそあれ、物質が所与で具体＝凝集化への感度をもたないようであると、イマージュ論にとっても都合がつかない。本稿で繰り返し主張してきた通りであるなら、シモンドンはそこを改良してベルクソン哲学を強化していくだろう。

こうして、information は最終的にはイマージュの問題系と接続してくる。先に述べたように、本稿では指摘まで辿り着くのが精一杯であったが、information を突きつめて考えようとするならば、イマージュを再考することが欠かせないことになるだろう。

結語にかえて

本稿では、さまざまな用いられ方をしており、諸々混乱を巻き起こしてきたように思われるシモンドンの information 概念の基軸を、ベルクソンという哲学的背景を据えることで定めようとした。そこから見えてきたのは、齟齬から生じる意味作用という information の動勢と、分化に偏りがちなベルクソンの哲学を、統合で補完しようとするかのようなシモンドンの哲学であった。

もちろん、information の記述は実際にはかなり複雑に映る。構造との関係、潜在性の問題、時間性との関連、記号としての information、生物的本能のなかの information など、枚挙に暇がない。つまり、本稿で扱った information は、あくまで概念の極一部である。いわば本稿には、あえて少ない定義を延長することで混乱をスローダウンさせ、整理に寄与する目的があったといえる。

しかしながら、シモンドンの information は冒頭で彼の中心概念であると述べた通り、いわばシモンドンの哲学全体に展開させてみたとき、その輝きを放つことだろう。冒頭の引用の通り information が「根源から生物を変える可能性」があるというのは、おそらく伊達ではない。難儀なことだがそれはなお今後の課題としたい。

最後に、本稿で強調してきたシモンドンの思想の源泉としてベルクソンを対照する可能性について言及しておく。

本稿では、ベルクソンとシモンドンの間の系譜関係を、シモンドンの information という語に注目することを通して示してきた。実際、ベルクソンにおいては独自の意味をもっていなかったこの information という語にすら、ベルクソンの影をみてとることができるなら、シモンドンはベルクソンの後継者の一人でなくて何であろうか。これまでではとりわけ、技術論と自然哲学の系譜のなかに見いだされてきた⁽⁵⁰⁾ ベルクソンとシモンドンの「師弟関係」の裾野はまだまだ広いとわれわれは考える。なお、ドゥルーズを交えた三者関係になる傾向のある、個体化論については言うまでもない。

そうして、information という何もベルクソンにおいて独自の使われ方をしていない語を、ベルクソンの後継者の一人と目されるシモンドンがどう駆使しているかをみてきたわけであるが、一見遺産から外れそうな概念を検討することは、シモンドンにベルクソンの後継者としての資格を試すことでもあったろう。ここまで議論の運行を見守ってきたわれわれが思うに、シモンドンのベルクソンニアンぶりは隔々まで行き渡っているように思われる。あるいは、「類と個体」や「直観とトランスダクション」などのベルクソンとシモンドン対照における既存テーマ⁽⁵¹⁾を扱った方がより強く示せることなのかもしれないが、後代のシモンドンが展開した「未来のベルクソン」もベルクソン研究の深化にあるいは参与してくれるのではなかろうか。それを願ってやまない。

註

- (1) 本稿の中心をなすベルクソンとの対照部分は、拙論からなる仏語発表の日本語訳を加筆修正したものであることをお断りしておく。Shin'ichi Tachibana, « Bergson et Simondon : autour du concept d'information », Séminaire pour jeunes chercheurs comme le programme avant Colloque international « Bergson et le désastre », 23 octobre 2011, à l'Université d'Hosei.
- (2) 米虫正巳「自然哲学は存在し得るか——シモンドンの自然哲学（上）」『思想』第4号、岩波書店、2010、pp. 34-51. における、とりわけ注の(14)を参照のこと。
- (3) 河野哲也「シモンドンの知覚論」『フランス哲学・思想研究』第16号、日仏哲学会、2011、p. 33.
- (4) 瑣末なことだが事実として、シモンドンは文献註をほとんど付けない。そのため、講義録などに残る数少ない文献表は貴重である。
- (5) Gilbert Simondon, *Communication et information. Cours et conférences*, établie par Nathalie Simondon et présentée par Jean-Yves Chateau, Chatou, Éditions de la transparence, 2010, p.135. [以下 CI と略記。] ド・プロイの論集は *La cybernétique: théorie du signal et de l'information*, réunions d'études et de mises au point tenues sous la présidence de Louis De Broglie, éditions de la revue d'optique théorique et instrumentale, Paris, 1951.
- (6) シモンドンと「三大思想」の関連についての紹介は、Jean-Hugues Barthélémy, *Penser l'individuation. Simondon et la philosophie de la nature*, Paris, L'Harmattan, 2005. を参照のこと。
- (7) Isabelle Stengers が「シモンドン・マジック」と形容しているのは、こうしたテキストの在り方だろう。Isabelle Stengers, « Comment hériter de Simondon? », *Gilbert simondon. une pensée opérative*, Saint-Étienne, PU Saint-Étienne, 2002.
- (8) とりわけ以下の三箇所を参照のこと。Henri Bergson, *L' évolution créatrice* [1907], Paris, PUF, 2008, p. 290. [以下 EC と略記。] ; Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion* [1932], Paris, PUF, 2008, p. 292. [以下 DS と略記。] ; Henri Bergson, *La pensée et le mouvant* [1938], Paris, PUF, 2009, p. 74. [以下 PM と略記。]
- (9) EC, p. 184.
- (10) 原語は *Homo faber*. もっとも、ベルクソンが反対するのはもっぱら、ホモ・ロクワクス〔言語人 *Homo loquax*〕である。PM を参照のこと。
- (11) EC, p. 140.
- (12) EC, p. 154.
- (13) EC, p. 211.
- (14) Plotin, *Ennéades*, III[1925], trans. Émile Bréhier, Paris, PUF, 1963.

- (15) Henri Hude, *Bergson: Cours IV*, Paris, PUF, 2000, p.45. ここで言われているようなことに対して、シモンドンは生物的個体化における脱分化 (dédifférenciation) の事例を持ち出すだろう (c.f. ILFI 182)。それは発生の過程で一度は形成途上に入りながらも結局成体には組み込まれず、物質に戻る現象をさす。
- (16) Gilbert Simondon, *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*, Grenoble, Millon, 2005, p. 50. [以下 ILFI と略記。]
- (17) 米虫正巳「<一>以上のものとしての自然——シモンドンの自然哲学 (下)」『思想』第 6 号、岩波書店、2010。
- (18) Gilbert Simondon, *Du mode d'existence des objets techniques* [1958], Paris, Aubier, 2001, p. 244. [以下 MEOT と略記。]
- (19) ILFI, p. 43.
- (20) ILFI, p. 47.
- (21) MEOT, p. 20.
- (22) MEOT, p. 23.
- (23) ILFI, p. 49.
- (24) ILFI, p. 35. *disparation* はもともと「[網膜] 歪覚」の意味をもつ医学用語である。したがって、シモンドンのこの語の応用はおそらく、たとえば『サイバネティクス』第 6 章「ゲシュタルトと普遍的概念」で挙げられている例に由来すると推察される。Norbert Wiener, *Cybernetics: or Control and Communication in the Animal and the Machine*, Massachusetts, MIT pr., 1948, p. 138.
- (25) ILFI, p. 208.
- (26) すでに廣瀬浩司氏は、1995 年という早い段階からシモンドンの *information* は *disparation* に注目して読むという方向性を指し示していた。廣瀬浩司「個体化の多様性と存在の統一のかなたに (情報・エネルギー・システム) ——ジルベール・シモンドン思想の射程 (1)」『外国語科研究紀要』第 42 号、東京大学教養学部外国語科、1995。
- (27) MM, p. 63.
- (28) この言葉の訳は著しく割れているが、われわれは以下を採用する。『ベルクソン全集 2——物質と記憶』白水社、田島節夫訳、2001。
- (29) ILFI, p. 302.
- (30) 「超個体的なものは個体とともにあるが、個体化された個体ではない (ILFI 303)。」
- (31) ILFI, p. 297.
- (32) DS, p. 316.
- (33) 「個体化された存在は、はじめから一つの精神と一つの身体ではない。それは徐々に二重化され、個性化されるものとして構築される。厳密に言えば心的個体化というものはない。あるのは、身体的なものとの心的なものの原因になる、生命的なもの個性化 (*individualisation*) である (ILFI 268)。」
- (34) DS, p. 316.
- (35) ILFI, p. 54.
- (36) MEOT, p. 137. *forme* は本来訳し分けるべきであるが、本稿では質料形相論批判を大きく扱ってきたため、「形相」で統一する。無論、カントの意味での「形式」や生物学的な「形態」、「ゲシュタルト」などがその訳語である。
- (37) CI, p. 159.
- (38) ILFI, p. 191.
- (39) Xavier Guchet は、シモンドンの直接の師であるメルロ＝ポンティやカンギレムとベルクソンを並列して、シモンドンはこの三人の強い影響下にあると述べている。Xavier Guchet, *Pour un humanisme technologique. culture, technique, et société dans la philosophie de Gilbert Simondon*, Paris, PUF, 2010.
- (40) 廣瀬浩司「技術的対象の現象学——ジルベール・シモンドン思想の射程 (2)」『外国語科研究紀要』第 43 号、東京大学教養学部外国語科、1996、p. 30。

- (41) ILFI, p. 294.
- (42) この語はサイバネティクスでは「ヒステリシス差」を意味する。ヒステリシス差とは、以前同様の何らかの力が加えられても、元には戻らずなお残存する構造のことであり、例えば磁気記憶などがそれにあたる。すなわち、やはりシモンドンの意味での関係的な語である。
- (43) MEOT, p. 254.
- (44) MEOT, p. 74.
- (45) 藤田尚志氏はシモンドンの講義録『構想力と発明』におけるイマージュの四段階の内、先取りと知覚はベルクソンの『物質と記憶』に、記憶と発明は『創造的進化』と『二源泉』によく対応していると指摘している。Hisashi Fujita, « Imagination et invention chez Bergson et Simondon », Colloque international: Le système métastable et l'individuation – autour de la philosophie de Gilbert Simondon, 24 mars 2010, à l'Université de Meiji. また、現在まで最もこの問題に迫った論考として、中村大介「シモンドンの技術論におけるイマージュと構想力」『フランス哲学・思想研究』第16号、日仏哲学会、2011を参照のこと。中村氏は精緻な読解に基づいて、以下のような刺激的な展望を提示している。「シモンドンのイマージュ論の哲学的源泉を次のようにまとめることができよう。ベルクソンに倣ってイマージュを主観の領域から解放した上で、物質的要素の持つ固有のイマージュの動性からシンボル - 対象や技術的対象の有するイマージュの生成へと問題圏を拡張し、さらには、物質的要素の備える二重の加担をシンボル - 対象の準安定性と読み替えることで、シモンドンはバシュラールの着想を転用しているように思われる (pp. 22-23)。」この見立ての通りならシモンドンはここで、よく知られた持続と瞬間の論争を調停するかのように、ベルクソンにバシュラールを接ぎ足していることになるだろう。
- (46) MEOT, p. 72.
- (47) MEOT, p. 73.
- (48) トランスダクションについては以下のように口頭発表を行っている。橘真一「トランスダクションについて——ジルベール・シモンドンの哲学的射程」日仏哲学会、2011年9月11日、於：大阪大学。
- (49) MM, pp. 63-64.
- (50) Florence Caeymaex, « Esprit et technique selon Bergson », in *Les philosophes et la technique*, éd. Pascal Chabot, et Gilbert Hottot, Paris, Vrin, 2003 ; 米虫正巳「フランス技術哲学の中のベルクソン」『思想』第一二号、岩波書店、2009。
- (51) Su-Young Hwang, «Bergson et Simondon: autour du problème de l'individu et du genre», *Revue Philosophique de Louvain*, 109(2), Louvain, 2011; Sarah Margairaz, «De l'intuition à la transduction: par-delà la valeur heuristique de l'analogie – Une interprétation de la filiation entre Bergson et Simondon», in *Cahiers Simondon*, n°2, Paris, L'Harmattan, 2010.

Sur le concept d'information chez Gilbert Simondon

Shin'ichi TACHIBANA

Abstract:

Cet article propose d'examiner l'usage du concept d'information chez le philosophe français Gilbert Simondon (1924-1989) afin de montrer comment il sert une interprétation de la pensée d'Henri Bergson (1859-1941). Nous nous pencherons d'abord sur le contexte dans lequel Bergson emploie le terme « informer » afin de dégager les problématiques afférentes à ce terme. Nous nous interrogerons plus particulièrement ensuite sur le motif de la critique de l'hylémorphisme par Simondon. Nous examinerons enfin comment, parvenu au stade de définir ce qu'est l'information, nous pouvons accéder à l'esprit même de la philosophie de Bergson. Nous voudrions établir que Simondon est indubitablement un héritier de Bergson et que sa philosophie permet d'en faire une relecture approfondie.

Key Words : Gilbert Simondon, Henri Bergson, information, disparation, signification